

熊野の  
木林から



串本沖に出たという船幽霊。海中から現れ「柄杓を貸せ」と脅す。怯えて柄杓を貸してしまうと、海から水をくみ上げて船を沈めてしまう。(イラストはBoBo)

串本と大島の間には橋を造るに思った弘法大師が、串本と大島の間には橋を造る

詞にもあるように、本物の橋ができるまでは船が不可欠であった。その昔、この交通の不便さをふびんに思った弘法大師が、串本と大島の間には橋を造る

# 怪熊野

「串本の怪異(其の二)」

其の(五)

和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授

うとしたが、途中で工事を断念した話が伝わる。その痕跡が名勝「橋杭岩」だ。工事を断念させた犯人は天邪鬼(あまのじやく)という鬼で、地元だけでなく全国的にも有名な話となつている。天邪鬼が公共工事の邪魔をしたという話は、紀伊半島では橋杭岩にあるだけで、工事や事業の邪魔をするのは、もっぱら天狗(てんぐ)であった。天狗は山の守り神であり、自然保護のために人間の破壊行為をやめさせようとしたとみられる。筆者は、日頃から天邪鬼的なヒネクレタ言動をしがちで、そのせいか自然や風景を大切にしない「乱暴な開発」には待ったをかけ続けている。それは天狗と同じ考えだからなのかも知れない。



串本や大島の目の前は太平洋の大海原が広がる。美しく、海の幸の宝庫であるが、近年は地球温暖化の影響で海水温が上昇しており、漁業にとって深刻な問題となっている。

串本の海には、古座浦にも出沒したと云われる海の鬼女イシナゲンジヨ、海中から現れて船を沈めてしまう船幽霊の話が伝わるが、怪物話として「磯ムカデ」の話も残る。出沒場所は特定できないが大島周辺の磯に出たとみられる。その昔、ある

男がイガミ(ブダイ)を釣ったところ、その日は大漁であった。そのうち、真つ赤なモノが波打ち際に居ることに気付いた。それは、釣り上げた大量のイガミを喰いまくる大ムカデであった。男は急いで逃げ帰ったが、体中が真つ赤になつて間もなく息を引き取ったという。波打ち際に居る赤い怪物とは何であろうか？昔は紀伊半島にはアシカが多く見られたらしいが、体の色や形が違う。サメでもなさそう。男が、体中が真つ赤になった理由は過剰な日焼けのことであろうか？いずれにせよ、大漁だと喜んで欲張ることは良くないという教訓が込められていそうな話だ。

串本の海は美しい。海の幸も与えてくれる。しかし、様々な危険と隣り合わせであることを昔の人は良く知っていたからこそ、海の怪異話が数々残されているのであろう。

**中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール**  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

